

壺中の聖水

- インドにおける豊穰性と浄化性の自然観 -

Matka pots' sacred water : An Indian belief in nature's fertilizing and purifying properties

脇園賀子

北九州市立大学

目次

はじめに	5 - 2 儀式用としてのクンプッ
1 概要	5 - 3 聖水信仰
2 土器製作カースト・クムハル	6 結論
3 日用品としてのマッカ	註
4 人々の壺に対する意識の事例	参考文献
5 神話・儀式・聖水信仰にみられる壺のメタファー	謝辞
5 - 1 クムハルにまつわる神話	

はじめに

暑さと乾燥が厳しい北インドでは、いたるところで土器の水壺を目にする。この壺はマッカ (matka) とよばれ、多くの人々の必需品である。マッカは、釉薬をかけずに焼成した素焼きの状態であるため、壺表面から水が蒸発するときに発生する気化熱が壺中の水を冷やし、表面の小さい穴が不純物を吸収する。このような水の冷却機能や濾過機能を持つマッカは、インドの気候や風土に非常に適している。

しかし近年、プラスチックや金属といった新素材の到来により、土器製品の使用が減少したことが報告されている (Saraswati 1966, 1979)。マッカと代用が可能な冷蔵庫や浄水器が普及し始めた現状からも、土器製品であるマッカの利用価値は低下しつつあると思われるが、

これまでの土器文化の研究は、土器製品の作り手であるクムハル(註1)の人口変化、土器製作に用いる道具や技術の後進性、土器の種類や製作技術におかれてきた (Saraswati 1966, 1979; 鹿野 1978; Krishnan 1989; 関根 2001)。

だが本論文では、土器の使い手の視点に立ち、人々は土器をどのように使用し、土器にたいしてどのような意識を持っているかに重点を置く。今回の調査で、マッカと同じ機能を持つ冷蔵庫や浄水器を所有する人々も、マッカを好んで使用していることが分かった。中には、浄水器に通した水をわざわざマッカに移し変えて飲料水としている事例もあった。冷蔵庫や浄水器を所有しながらもマッカを必要とする理由は、その機能からだけでは説明がつかない。マッカの根強い人気は、壺や水への独自の観念が関係しているようだ。

論文の後半では、新素材の導入や冷蔵庫・浄水器の普及にもかかわらず、マッカが根強い人気を保っている理由を聞き取り調査をもとに分析する。まず、クムハルにまつわる神話を取り上げ、マッカの作り手である土器製作カースト・クムハルが人々によってどのような存在なのかを考える。クムハルの社会的・経済的地位は低いが、神話上では特別な存在とされているようだ。次に、マッカの作り手であるクムハルによって、マッカと同じ土を使用して製作されるクンプットと呼ばれる儀式用の壺が、どのような象徴性を持つか論証する。続いて、ヒンドゥー教の神話、マヌ法典、リグ・ヴェーダにみられる聖水信仰をあげる。以上の考察から、インドの人々の水に対する独自の観念が、マッカの根強い人気の一因となっていることが明らかになった。

本論文の調査は、2003年8月中旬から9月末の約1ヶ月半にわたり、ラジャスターン(Rajasthan)州の州都であるジャイプル(Jaipur)周辺約11kmとデリー(Delhi)でおこなった。

1. 概要

今回調査をおこなったジャイプルは、インド共和国の首都デリーから南西 262km に位置する都市である(図 1,2)。ジャイ・シン 2 世(Maharaja Jai Singh)画 18 世紀初頭につくった城塞都市であり、旧市街は計画都市のため、整然と区画されている。言語的にはヒンディー語の方言であるラジャスターニ(Rajasthani)を話す地域で、おもにヒンドゥー教とイスラム教が信仰されている(Census of India 2001)。ラジャスターン州の都市部における人口密度は 129、農村部における人口密度は 101。対して、デリー都市部の人口密度は 6352、農村部で 190 である(Census of India1991)。

気候は 6 月から 8 月にかけて雨季、9 月から 5 月

にかけては乾季に分かれており、1 年通しての最高気温は 41 、最低気温 8 である(Vardhman's Destination Guide Jaipur City)。デリーの気温はジャイプルの気温より若干低い。

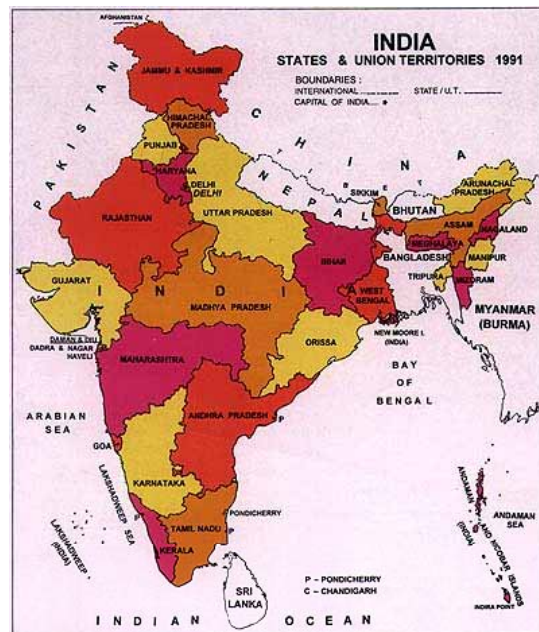


図1 インド全域図(Census 1991)

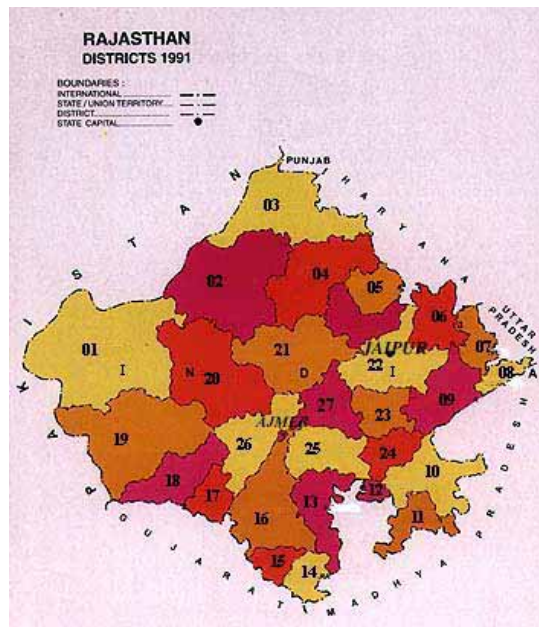


図2 ラジャスターン州地図

ジャイプルは地図中の 22 番に位置する(Census 1991)

2. 土器製作カースト・クムハルの概要

土器は、土器製作カースト・クムハルという職業カースト(註2)によって製作される。クムハルの社会的地位は地域によって異なるが、一般的にはシュードラとされている。カースト制の浄・不浄観念に基づくと浄の部類に入り、ハリジャン(註3)よりは上位で、他の職業カーストと同じ地位とみなされる(Saraswati 1979,1996)。

クムハルは、水壺、コップ、ヨーグルト入れ、植木鉢といった日用品をはじめ、ディーパック(註4)、クンプツ(5章を参照)といった儀式に使用される製品も製作する。

土器の製作には、一般的に手回しロクロ(註5)が使用される。土器の製作の方法としては、ロクロだけで製作するものと、ロクロで大まかな形を作った後にたたいて完成するものがある。ラッシー(註6)グラスや貯金箱などの小物はロクロだけで製作されるが、マッカや平皿は後者の製作方法である。マッカは、次のような手順で製作される。まずはじめに、ロクロで厚めの壺を製作し、日陰でしばらく乾かす。それから適度に乾いた壺をたたき台に載せ、内壁をあて具で支えながら、叩き板で外壁をたたき締める。焼成方法(註7)は様々だが、マッカはレンガ作りの常設の窯で焼成することが多い。

3. 日用品としてのマッカ

インドにおける一般的な飲み物は、水とチャイ(註8)である。水は1日に何度も飲まれ、人々の喉を潤し、厳しい暑さと乾燥による脱水症状を防ぐ役割を担っている。一方チャイは人々が集う際に飲まれ、コミュニケーションの潤滑油として役立っているようだ。

著者の調査地のジャイプルとデリーでは、水はマッカという水壺に蓄えられる。マッカは、水の冷却機能や濾過機能を持ち合わせており、1個当た

り10~15リットルの水が入る。土器表面はいつも濡れておりひんやりと冷たく、気温が高ければ高いほど気化熱によって壺中の水が冷却される。また、土器表面の小さい穴が、硬水に含まれる石灰成分を吸収する役割も持ち合わせている。マッカに水を入れて2,3時間もすると、日陰に置かれたセメント製タンクの水よりも約2ほど水温が低くなり、味もまろやかになる。

マッカは、土器製品を専門に扱う店や露天、クムハルの家先にて1個が約Rs(ルピー)10~15(註9)で販売されており(2003年9月 ジャイプル調べ)、その大きさ、形、色、デザインは地域によって大きく異なる。ジャイプル市内のマッカは、灰色でペインティングされているものや金色と赤茶色で彩られたもの、全体的に黒いものの3種類に分けられる(写真1,2)。デリーのマッカは高台があるものが多いが、ジャイプルのものは、高台がなく底面が丸い。底面が丸いマッカは、コンクリート製や金属製の支えの上において使用される。



写真1(左:草文様のような装飾を施されたマルカ、右:金色と赤茶のマルカ)

焼成前のマルカの表面には雲母が叩き付けられる。雲母は酸化焼成で金色に、還元焼成で黒色に発色する。焼成前に水で溶かした黄土を塗りつけると、赤茶に発色する。現在見られるラジャスタン州の壺の幾何学的な装飾が、モヘンジョダロやハラッパーから発掘された壺の装飾と

似通っているという報告もある (Saraswati 1966)。

撮影：Jaipur の素焼き製品専門店 (2003 年 8 月)



写真 2

雲母は還元焼成で黒色に発色する。黒色のマルカは写真 1 のマルカに比べ、水の冷えがよいという。黒色のマルカは日常生活にのみ使用され、儀式に使用されることはない。撮影：ジャイプル郊外 JaiSingh Pura Khor (2003 年 8 月)

マッカを使用し始めて 2,3 ヶ月すると、水の冷えが悪くなる。これは、硬水に含まれている石灰成分が表面の小さい穴に詰まり、水が壺の外にもれなくなるため気化熱が発生しなくなることが原因となっている。穴が詰まってしまったマッカは、底面だけ切り取りチャパティー(註 10)のフライパンとしたり、半分に切って植物プランターとして再利用される(写真 3, 4)。



写真 3

古くなったマルカの底面部を切り取り、チャパティーのフライパンとして再利用する。写真の土製のかまども、クムハルによって製作される。マルカで作ったフライパンで焼いたチャパティーは、金属性のフライパンで焼いたものよりも、ふっくらと焼けるという。味の好みによって、マルカで作った土製のフライパンと、市販されている金属製のフライパンを使い分けるそうだ。

撮影：情報提供者(5)の自宅(2003年 9月)



写真 4

古くなったマルカをハンマーで半分に割り、植物プランターや鳥の水入れとして使うことも多い。写真は、著者が滞在した家の屋上に保管されていたものである。

撮影：ジャイブルの民家（2004年9月）

このように庶民の生活に土器は欠かせないものだが、近年、プラスチックや金属製品の広まりでどき文化が衰退し、マッカを製作するクムハルも経済状況が厳しくなったといわれている（Sawaswati 1966）。

しかし著者は、日用品のマッカ、ディヴァーリー（Diwali）（註11）の祭りに使用されるディーパック（Diipak）（註4）や儀式用の壺クンプッは、いまだに生活の必需品であると印象を持った。

そこで次章では、人々のマッカの使用状況やマッカの水に対する意識を検証するために、ジャイブルとデリーでの聞き取り調査の結果を記す。

4. 人々の壺に対する意識の事例

前章では、マッカが優れた機能性を備え、価格的にも庶民に手に入れやすい生活必需品であることを述べた。この章では、ジャイブルとデリーに住む人々の『マッカ』と『マッカの中の水』に対する意識や、マッカを買い換える頻度などの事例を数例あげたい。

調査は、2003年8月中旬から9月末の約1ヵ月半にわたり、ラジャスターン州の州都であるジャイブルとデリーでおこなった。聞き取り調査をおこなったジャイブルのインフォーマント8人と、デリーのインフォーマント4人の事例のうち、特徴的なもののみを記載する。

乾期に当たる9月から翌5月までは、雨が少ないため断水が一般的である。そのため、インドでは貯水タンクや壺に生活用水を汲み置きする習慣がある。普段は配水車から水を得ているものも、断水時には一時的に井戸水を使用することがある。

ジャイブルの事例

(1)

インフォーマント：政府管轄のブルーボタリー（註12）作業所のマネージャー（男性 50代）

家のつくり：3階建て

住人：インフォーマントの母親、妻、長男（25歳）とその妻（20歳）、次男（23歳）、三男（19歳）の7人

冷蔵庫：所有

浄水器：所有



写真5（左：浄水器 中央：真鍮の壺 右：マルカ）

情報提供者（1）の家の台所の様子。左の浄水器で濾過した水をマルカに移し変え、飲料水とする。中央にある真鍮の壺は、浄水器に水を補充する際や、料理に使用する。

撮影：情報提供者（1）の自宅（2004年9月）

備え付けたガスコンロで、中腰になって調理するタイプの台所が多い中、この家には、立ったまま調理できる台所がある。台所の浄水器の横に、金属製の壺が2個とマッカが1個おかれていた（写真5）。浄水器に通した水をマッカにいれて、飲料水用に使っているという。浄水器で濾過した水を、わざわざマッカに移し変える理由として、以下の2つが考えられる。マッカでは不純物を濾過しきれないため、浄水器で濾過する。冷蔵庫で冷やした水は冷たすぎるため、マッカに移し変えて水を程よく冷却する。インフォーマントを含めて家族全員が、冷蔵庫の水は喉が痛くなるから飲まないそ

うだ。冷蔵庫の水よりも、マッカの水のほうが美味しいとの事だった。水が冷えなくなったら、新しいマッカに取り替えるという。

インフォーマントの息子 3 人は、海外への輸出入の運送業を営んでいる。貧しさのため義務教育(註 13)を受けられない子どもたちが多く、息子 3 人ともが大学に進学している。

(2)

インフォーマント：ブルーボタリーの支配人(女性 30 代後半)

家のつくり：4 階建ての家

住人：インフォーマントの家族を含めた親戚一同

冷蔵庫：所有

浄水器：なし

このインフォーマントの自宅には、大人数の家族が住んでおり、台所には飲料用マッカが計 4 個ある。水は 1 日に 2,3 回補給され、毎月新しいマッカに取り替えられるそう。マッカの好みについてたずねたところ、短期間しか使用しないので特にこだわりはないということだった。インフォーマント本人は、冷蔵庫の水は冷えすぎて喉を痛めるし、喉がすぐに乾くのであまり飲まないという。一方、マッカの水は適度に冷えていて体によいということだった。インフォーマントの親族の子どもたちは、夏場には冷蔵庫の冷たい水を好むが、親たちはなるべく健康のためにとマッカの水を飲ませるようにしているという。

インフォーマントには、何世代も前から取引があるクムハルがあり、インフォーマントの家に定期的に注文をとりに来るといふ。マッカの交換時期や儀式の際は、クムハルが自分から顧客の家に出向くそう。この周辺の土地で 3 世代くらい住んでいる家庭には、たいてい懇意のクムハルがいるという。昔は祭りの期間中、クムハルの製品と穀物 25 キログラムを引き換えにしていたそうだが、最近では製品を穀物と交換するか、現金で支払い

を受けるかをクムハル側が選べるようになったという。この家族は、1 回の注文につき 10~15 個のマッカを購入して、使用するまで家に保管しておくということだ。

4 階建てのこの家には、インフォーマントの家族や親戚が同居している。各部屋には、大理石の彫刻や骨董品が飾られており、裕福な家庭と思われる。同居する人数が多いため、マッカに水を補給する頻度や、マッカを買い換える頻度が高い。マッカの好みに関する質問に対し、マッカは短期間しか使用しないのでこだわりはないという発言からも、マッカは使い捨てするものという意識がうかがえる。大人はマッカの水は体によいと思っている一方、子どもたちはよく冷えた冷蔵庫の水を好むという。世代が若くなればなるほど、『マッカ』や『マッカの水』に対する愛着は薄くなるようだ。

(3)

インフォーマント：大理石の彫刻製造・販売の支配人の娘(女性 20 代)

家のつくり：4 階建て

住人：インフォーマントの両親と兄弟 3 人の 5 人家族

冷蔵庫：所有

浄水器：不明

調査をおこなった 12 軒のうち、この家族が唯一マッカを所有していなかった。飲料水は、冷蔵庫で冷やしたプラスチックのボトルの水だという。浄水器を所有しているかどうかは不明である。現在はマッカを使用していないとのことだったが、屋上にはマッカを割って作った植物プランターがおかれていた。よって、過去にマッカを使用していたことがわかる。4 階建ての建物の 1 階部分は、大理石製造の事務所として利用されていた。

(4)

インフォーマント：ブルーボタリーの作業員(男性 42 歳)

家のつくり：1階建て

住人：インフォーマントとその妻(40歳代)、息子(22歳)、娘(16歳)の4人家族

冷蔵庫：なし

浄水器：なし

インフォーマント宅の中庭には、飲料用のマッカが1つ置かれている。マッカの冷却機能がなくなったときに、新しいもの買い換えられる。夏場は1ヶ月から2ヶ月で新しいマッカに買い換えるそうだ。親戚や近所の人にはインフォーマントの家を訪問し、自由にマッカの水を飲んでいい。この周辺では、女性たちが肩の上やわき腹にマッカを抱えて、井戸水を汲みに来る様子が毎朝見られた。配水者の給水に対して支払いができないものたちは、無料で利用できる井戸水を汲みに来るそうだ。配水者が来ると、セメント製のタンクに水をため、調理や水浴びに使用する水を小出しにして生活している。

マッカは家族以外が立ち入る玄関前や中庭に設置されることが多く、近所の人や親戚の人々も自由に利用できる。人々は、マッカの横の備え付けられた柄杓で水を掬い、口に流し込む。柄杓に直接口をつけることはない、人々が懸念する他人の唾液と接触することもない。

デリーの事例

(5)

インフォーマント：主婦(30歳代)

家のつくり：3階建ての建物の2階に住む

住人：インフォーマントの夫(37歳)と娘の3人

冷蔵庫：所有

浄水器：所有

浄水器に通した水をマッカに移し換え、飲み水としている。この家族はマッカを壊れるまで利用するという。祭りのさいには新しいマッカに取り替えるといったが、実際はそうではないらし

く3年前から同じマッカが台所にあるそうだ。基本的には、マッカは壊れるまで使用し続けるそうだ。医者には冷蔵庫の水は代謝を悪くするので肥満気味の人には避けたほうが良いと勧められたため、インフォーマントはマッカの水を飲むようにしたという。マッカの水を飲んでいるのはインフォーマントだけで、インフォーマントの夫と娘は冷蔵庫の水を飲んでいる。インフォーマントはマッカの購入基準について、1番に叩いたときの音、2番目にサイズ、3番目に色をあげていた。叩くことで、マッカがよく焼けているか、壊れていないかを確認するそうだ。

インフォーマントは、ニューデリーの住宅街に住む。その周辺の土器専門店では、マッカがジャイプルの2倍以上の値段であるRs40で販売されていた。彼女は都会でも再び土器の良さが見直されてきたと話していた。

(6)

インフォーマント：学生(男性 25歳)

家のつくり：3階建て

住人：インフォーマントの両親と妹の4人

冷蔵庫：所有

浄水器：所有

台所にマッカがおかれていたが、実際使用するのはインフォーマントの父親だけという。インフォーマントを含めた家族は、冷蔵庫で保冷した水を飲むが、父親がnatural(自然のもの)を好むということでマッカをおいているそうだ。マッカは壊れるまで使用し、浄水器を通した水をマッカに移し変えたものを飲み水にする。

家には多くの観葉植物が置かれており、その植木鉢のほとんどが土器であった。インフォーマントが、クムハルが作りかけた素焼き前の灰色の製品をみたとき、「この色だったら誰も買わないから、赤の土でペイントするのだ」と話した。実際にインフォーマントと訪れたクムハルは、焼成前の仕

上げとして灰色の製品に黄土を塗っていた。マッカを購入するときには色やデザインは気にしないといっていたが、実際には土器の機能とは関係のない視覚的要素も気になっているようだ。

興味深いのは、薬品会社で働いているインフォーマントの父親が、英語を使ったインタビューの中で、natural なものを好むと表現した点である。インフォーマントの父親は、土器の土のにおいが好きだと話していたことから、ここでいう natural は、土器の材料の土を言及していると考えられる。

浄水器で濾過した水は不純物を含まず、マッカの表面が詰まることがない。したがって、マッカの冷却機能は長続きすると思われる。しかし、このインフォーマントの家庭では、すでに何年も同じマッカを使い続けていることから、冷却機能や濾過機能を目的としてマッカを使用しているとは考えにくい。

(7)

インフォーマント：冷蔵庫を作る作業員

家のつくり：1階建て

住人：インフォーマントの妻と子どもたち

冷蔵庫：なし

浄水器：なし

このインフォーマント宅は、デリー都市部から離れた農村地帯にある。彼は冷蔵庫工場で働いているにもかかわらず、「冷蔵庫は家の病気だ」という。冷蔵庫で冷えすぎた水はのどを痛めるし、細菌が繁殖する病気の源だと信じているため、インフォーマントおよび彼の家族はマッカの水を飲む。

マッカを水入れとして利用した後は、冬場の暖炉、鳥のえさ入れ、プランターとして利用するそうだ。彼の家庭では1ヶ月、最長2ヶ月で取り替えるという。

マッカの購入基準を尋ねたところ、一番に叩いたときの音があげられた。音によってマッカがよく焼かれているか否かを知ることができるという。

マッカのデザインは購入基準とは関係ないといっていたが、「大きなものにはデザインが施されていなければならない」、「デザインがないものは使用されない。デザインはなくてはならないもの、あって当然のものだから」と主張していた。黒いマッカについては、黒は悪魔のサインだから結婚式には絶対使わないが、日常的には使用するという答えが返ってきた。

聞き取り調査をおこなったインフォーマントすべての事例をまとめると、図3のようになる。これを参考にすると、冷蔵庫の所有は、マッカを買い換える頻度に影響を与えないことがわかる。しかし、冷蔵庫と浄水器の両方を所有する家庭では、マッカの買い換え頻度が少ない。

インフォーマントによって多少の違いはあったものの、マッカの水はおいしく、衛生的で、健康によいとされる。一方、冷蔵庫の水は冷たすぎたのどが痛くなる、代謝を悪くするという。マッカの濾過機能で不純物が取り除かれた水をおいしく感じることや、冷えすぎた水が身体に悪影響を及ぼすという人々の説明も科学的に説明できる。

しかし、浄水器で濾過した水を、使い古したマッカにわざわざ入れ替えて飲料水としている事例は、人々がマッカに求めるものがその機能性だけでないことを示している。

なぜなら、マッカの冷却機能は数ヶ月しか維持せず、日がたつにつれてマッカの水の独特な味やにおいが薄れてくるからだ。よって、インフォーマント(5,6)のように使い古したマッカを使用し続ける事例は、マッカの冷却機能や濾過機能だけでは説明できない。また、インフォーマント(7)の「冷蔵庫は家の病気だ」、「細菌が繁殖する」という発言も、冷蔵庫で冷やしたプラスチックボトルの水は、マッカが持つ何かがかけているという考え方がうかがえる。人々は、水入れの壺や水に対して独特な意識を持っているようだ。次の章では、

マッカの作り手であるクムハルがどのような存在とされているか知るため、クムハルにまつわる神話を取り上げる。

5 神話・儀式・聖水信仰にみられる壺のメタファー

5 - 1 土器製作カースト・クムハルに関する神話

クムハルの社会的地位を語る上で、クムハルに関するヒन्दゥー教の神話も重要な意味を持つ。以下にあげた 2 つの話は、クムハルが登場する神話の一部である。

(1)昔々、シヴァ神(Shiva)がサティ神(Sati)と結婚する際に、自分の数珠の玉を 1 つ取り出し男と女を作った。そして、この男女に壺をつくるように命令した。彼らがのちのクムハルカーストである(Singh 1979)。

シヴァ神は、魔物を退治する破壊と降伏の神としての側面と、帰依者に恩寵を授ける恩恵の神としての側面がある神である(少年社 2002)。この神話では、クムハルはインドで広く信仰されているシヴァ神の数珠から創造されただけでなく、シヴァ神とサティ神の結婚式のために壺をつくる存在として描かれている。

(2)クムハルはブラフマン(Brahma)、ヴィシュヌ(Vishnu)、シャンカ(Shankar)の祝福により、この世に誕生した。ブラフマンは技術(kala)を、ヴィシュヌはロクロ(Chankra)を、そしてシャンカは形(swaroopa)をクムハルに与えた。クムハルは、神々から授かったものからクンブツ(kumbh)と呼ばれる儀式用の水入れをつくった。これがクムハルの名前の由来だとされている(Singh 1999)。

この神話上でも、クムハルが様々な神の授かりものや神の一部から誕生している。クムハルは、神々から与えられた時間、ロクロ、形の恩恵で、儀式用の水入れを製作するに至ったのである。以上にみられるようにクムハルは社会的経済的地位は低いものの、神が必要とする壺を製作する重要

な存在として描かれている。これらの神話との関係から、クムハル自身、クムハルが製作する土器、クムハルが土器製作に使用する道具が、人間の儀式にも不可欠とされていることが考えられる。次に、実際の儀式の中で壺がどのように使用され、どのような象徴性を持つのかを論じる。

5 - 2 儀式用の壺クンブツ

マッカが日常的に使用される壺であるのに対し、クンブツは儀礼の際に使用される壺である。マッカとクンブツとの違いは、大きさ、装飾、使用方法であるが、制作者、使用する材料の土、販売場所は同じである。クンブツはマッカよりも小柄で炭酸カルシウムで白色の波模様のような装飾がなされている(写真 6)。この種類の装飾が施されるのは、儀式用のものだけである(Saraswati 1966)。販売価格は小さいものから大きいものまであわせて Rs4~11 で、マッカの値段とあまり変わらない(2003 年 9 月 ジャイプル調べ)。



写真 6

クンバには数種類の大きさがあり、草文様の白色の装飾が施されている。小さいクンバを、大きなクンバの上に載せて使う(写真 8)。値段は小さいものから Rs 4、Rs 5、Rs 11。撮影：ジャイブルの素焼き製品専門店(2003年 8月)

クンブツが使用される儀式の 1 つに結婚式がある。北インドの結婚式は、農閑期にあたる 3 月から 5 月の暑い盛りにおこなわれることが多い(八木 1991)。今回は雨期時期に調査をおこなったので、実際に結婚式を目にすることができなかった。したがってこの章では、人々から聞いた結婚式にまつわる話や文献を参考に、儀式用の壺が持つ象徴性について考える。

ジャイブルやデリーには、婚姻儀礼にチャック・プージャと呼ばれる儀式がある。「チャック」はロクロ、「プージャ(註 14)」晴れ位牌を意味する。婚姻儀礼の一部として、新婦がクムハルの家を訪れ、クムハルの手回しのロクロを崇拝するのである。婚前の新婦はロクロの上に乗り、クムハルがロクロを 7 回転する(Sawaswati 1978)。

ロクロの上に置かれた土が、ヒンドゥー教徒の信仰するリング(男性性器)(註 15)を、ロクロがヨーニ(女性性器)を象徴するという。(Sawaswati 1978)。チャック・プージャは、結婚する女性の豊穰性と夫婦間のよい関係を祈ったものであるようだ。

クムハルは儀礼の中で、自分を訪ねてきた新婦にクンブツを贈り、お返しとして新婦からは金銭、サリー、穀物などを受け取る。結婚式ではクムハルから受け取ったクンブツを水で満たし、葉を飾る(写真 7, 8)。クンブツは水の生殖力と浄化力との関連が重視されることが報告されている。(樫根 2002)。



写真 7 (写真複写)

結婚式の様子。水が満たされたクンバの上には、供え物のお菓子が載せられる。

写真提供：Nari Ka Nakata 通りに住むクムハル



写真 8 (写真複写)

結婚式に参加した村の女たち。頭には、結婚式のためのクンバを載せている。クンバには、葉が飾られている。

写真提供：ジャイブルに住むクムハル

ウツタル・プラデーシュにおける婚姻儀礼にもカルシャーと呼ばれる儀式的な壺が登場する。婚姻儀礼では、女たちが歌いながら壺に牛糞と大麦をつけ、聖水を入れ、マンゴの葉でふたをする(八木 1991)。ウツタル・プラデーシュにおける婚姻儀礼にはジャイブルやデリーでみられるチャック・プージャはないものの、儀式用の壺が水で満たされ、葉が飾られるといった共通点がみられる。

ベンガル地方や南インドでは、水を満たした銅製の壺が女神(註 16)の象徴として奉られる(田中 1996 ; 外川 2003)。壺本体を女神とし、それを儀礼や祭りのシンボルとするのである。ベンガル地方では、女神の壺の浄めの水(シャンティ・ジョル)で沐浴することで、不妊の女性にも子が授かると信じられている(外川 2003)。女神の御神体の壺に入った水が豊穰力のみなぎった子宮を表し、そこに挿されるインドセイダンの葉が、子宮の生命力を象徴することも報告されている(田中 1996)。これらの報告から、壺本体や壺中の水が、生命を培う豊穰性の象徴としてとらえられていることがわかる。儀式においての壺は単なる水入れでなく、豊穰性と浄化の象徴であり、その壺の中の水も生殖力や浄化力を持つ特別なものになるのである。

また、ヒンドゥー教にとって、破壊は同時に再生を意味する。生と死は円状につながっており、破壊をさけては新しいものは生まれないとされている(Shulman 1980)。ヒンドゥー教徒は他人の唾液に対して極度の不浄観を持つが、中でも土器は穢れに敏感な存在とされる。浄化が比較的容易にできる金属製の食器に対し、土器や葉皿は、不浄の状態から使用前の状態に戻すことが難しいと考えられている。現在でも露天では、土器のコップでラッシー(註 7)が販売され、ラッシーを飲み干した後は路上に投げ捨てられる。一度使用したコップは穢れていると見なされるため、使い回すことはない。また、死によっても土器は穢れると考えられているため、家族の中に死者が出ると、家中の土器が破棄される。

ラジャスターン州のラージプート女性の豊穰儀礼では、女神に供える米のみが土器の鍋で料理される。米を炊き終わると、司会者が土器の壺を 8 つに割る。土器の破片には、米が盛りつけられ人々に配られる(外川 2003)。このように、すぐに壊せて土に戻すことができる土器の壺は、ヒンドゥー

の生と死、浄と不浄のメタファーに合致するのである。

5 - 3 聖水信仰

マッカの使用が広く支持される理由を考えるためには、壺そのものの象徴性だけでなく、その中の水が持つ象徴性についても知る必要がある。この章ではヒンドゥー教にまつわる神話、マヌ法典、宗教文献リグ・ヴェーダを通してヒンドゥー教徒の聖水信仰について考える。

ヒンドゥー教は、約 5000 年の年月をかけて今の形になった。アーリア人の宗教バラモン教に各村落の土着信仰が流入し、ついで仏教、ジャイナ教、イスラーム教が混じり合って形作られた(少年社 2002)。ヒンドゥー教徒がガンジス川で沐浴をおこなうことはよく知られている。われわれの衛生観念を基準にすると、死体や糞尿が浮いているガンジス川の水は不潔である。しかし、ヒンドゥー教徒にとってのガンジス川の水は、罪や心の穢れを浄めてくれるものとされる。

以下は、水との深い関わりのあるヒンドゥーの女神・ガンガー(ガンジス川)にまつわる神話である。聖河ガンジス(ガンガー)は、7本の支流とともに広大な大陸を潤して、無量の恵みを与えていることから、女神ガンガーは、大陸の生産に関わる女神とされる。

「ガンガーはヒマラヤの娘として生まれ、天界で育てられた女神だった。ところがそのガンガーに対して、下界に天降るように懇願する地上の王がいた。王は精神潔斎して祈願を捧げた。やがて女神はその願いを聞き入れることになるが、しかしいったいどうしたらそんなことができるのか。そこでシヴァ神が呼び出され、その大仕事を引き受けることになった。彼は天上から降下するガンガーの水流をまず額で受け止め、ついで頭髪の間から少しずつ地上に流出させるようにしたのであ

る。」(山折 1996)。

上記のような神話は、現在のガンジス川の信仰に多少なりとも影響を与えていると思われる。この神話では、ガンガーの源流は天上にある。現在でも、水と深い関わりを持っている女神ラクシュミー、河の女神サラスヴァティー、ガンガー(ガンジス川)の女神は、インドで最も広く崇拜されており人気の高い女神なのである(樞根 2002)。不毛の大地が広がるインドに住む人々にとって、水は心と身体の穢れを洗い流すものなのである。

マヌ法典(註 17)は紀元前後に編纂されたと推定され、ダルマシャスト(註 18)と総称される一大文献群のひとつである。今日でもヒンドゥー教徒の社会体制や人々の価値観の深層部を支配しているマヌ法典では(渡瀬 1990)世界創造がこのように語られる。

「宇宙は、かつて暗黒からなっていた。まず、水が生まれ、その中に種子が誕生した。種子は太陽のように輝く黄金の卵となり、その中にいっさいの世界の祖父ブラフマンが自ら誕生した。ブラフマンは黄金の卵の中で一年を過ごした後、卵を二分し、殻の一方で天を、他方で地を造り、中間に中空、八方角(方向)、海を配置した」(渡瀬 1990)。

暗黒の宇宙にはじめに現れた物質が水であり、その水がブラフマンの生命の種子を養う。マヌ法典において水は、「一切の世界の祖母」さえも生み出す豊穰の象徴として描かれている。

リグ・ヴェーダ(註 19)は、アーリア人が残したインド最古の宗教文献の中でも特に古いものであり、かつ最も重要な部分をなしている(辻 1970)。「一切を創造せし者」という意味の名を持つヴィシュヴァ・カルマンをたたえた宇宙創造の賛歌にこのようなものがある。

「(原始の)水すべての神々の監視の下に、最初の胎児として孕みしものは、そも何なりしや。水が最初の胎児として孕みしもの、その中にすべての

神々は相集まれり」(リグ・ヴェーダ 辻直四郎訳)。

リグ・ヴェーダもマヌ法典と同じように、原始の水からすべてが始まるとする。原始の水が胎児を孕みその胎児から一切が生まれるのだ。原水とその中に孕まれる胎児は、女神の子宮の象徴である壺の中の羊水を思わせる。

以上、ガンジスの沐浴、ガンジス川にまつわる神話、リグ・ヴェーダやマヌ法典の宇宙開闢の記述から、ヒンドゥー教徒にとって水がどのような意味を持つのかを記した。すなわちインドでは、水は穢れを洗い流す浄化性だけでなく、母なる水として大地や生命を育む豊穰性を持ち合わせているのである。

6 結論

4章の聞き取り調査で、水壺であるマッカは現在でも根強い人気を保っていることが明らかになった。仮に冷蔵庫や浄水器を所有していても、これらをマッカの代用品として利用することは少ない。マッカの水はおいしく身体によい一方、冷蔵庫の水は身体にわるいと考えられているからだ。確かに、冷えすぎた水はのどを痛めるし、身体の代謝にもよくない。しかし、「冷蔵庫は家の病気だ」、「細菌が繁殖する」というインフォーマントの発言の深層には、ヒンドゥー教徒の不浄観が影響していると考えられる。つまり、冷蔵庫は、壺が持つ浄化性や豊穰性を持ち合わせていないのである。浄水器で濾過した水をマッカに水を入れ替え飲料水とする事例も、マッカの使用理由がその機能性以外にも求められていることを示している。

上記を検討するため、壺や壺の中の水が持つ象徴性について考察した。儀式に使用される壺は、クムハルによって土で製作されるため、マッカとの関連性がある。著者の調査地であるジャイブルの婚姻儀礼では、女性の豊穰性や夫婦間のよい関係を願ったチャック・プージャがおこなわれる。

チャック・プージャには、クムハルの存在、土器製作に使用するロクロ、クムハルが製作する土器の壺が不可欠である。一連の儀式の中で、壺は豊穰と浄化の象徴とされているのだ。ベンガルや南インドの女神祭礼では、壺本体が女神とされ崇拜され(田中 1996;外川 2003)。その水で沐浴すると、不妊の女性も子を授かることができると信じられている。このことから、壺だけでなく壺中の水もまた豊穰性の象徴とされていることがわかる。また土器の壺は壊れやすく、簡単に自然に還るといふ性質も注目すべきである。ほかの素材が持ち合わせない土器特有の性質が、ヒンドゥーの浄・不浄観や、破壊・再生(生死)のメタファーに合致しているようだ。

インドにおけるガンジス川の沐浴といった聖水信仰にみられるように、水は罪や穢れを洗い流してくれる浄化の象徴である。それと同時に、水はすべてを生み出す豊穰の象徴でもあるのだ。ヒンドゥー教徒にとって、水は浄化性と豊穰性を持つ。よって、水を蓄える壺もまた、単なる水を入れるだけの容器ではない。それは「水」を、「聖なる水」、「生命力あふれた水」へとかえる特別な装置なのである。

註

1)クムハル

クムハル(kumhar)は日用品だけでなく、儀式に不可欠な土器製品を製作する職業カーストである。南アジアにおける土器文化は、金属製品、陶磁器、プラスチック製品の急速な普及により、都市部のみならず農村部においても変化がみられるようになった。そのため、一般的にインドにおける土器製作者の社会的・経済的状況は厳しいとされている。外的要因のみならず、クムハルの人口変化、土器製作に用いる道具や技術の更新性、販売市場

の問題、職業観の変化など、土器製作に携わるクムハルのあり方に関わる内的要因にも変化がみられることが報告されている(Saraswati 1966)。近年では、関根がインド西ベンガル州においての実地調査をおこない、土器の種類や製作技術について報告している(関根 2001)。

2)カースト

カーストはヴァルナとジャーティーに分けられる。ヴァルナとはブラーマン(司祭)、クシャトリア(王族・戦士)、ヴァイシャ(商人・農民その他)、シュードラ(農隷)の階級の枠組みである。ジャーティーとは、「生まれ」の意味で、世襲の職業集団を指す。一般には、これがカーストとして機能している。各ジャーティーには、それぞれの社会的身分に応じて守るべき規律が厳格に決められていて、社会の中でそれぞれの義務(ダルマ)を負っている(少年社 2002)。自分よりも低いカーストとの接触はいかなるものでも不浄を引き起こすと考えられているため、ほかのカーストとの接触をさげようとする(田中 1993)。

3)ハリジャン

不可触民のこと。不浄の民として差別されてきた。動物の死体処理、革細工、産婆などの下級のサービスに従事する。

4)ディーパック

ディヴァーリー(註11)やプージャ(註14)などの儀礼や祭りで使われる、灯火用の土器の容器。クムハルが製作する土器製品の1つである。ディーパックに油を注ぎ、綿花を細くよったものを縁に乗せ、それに火を灯す。普段は100個がRs10ほどで販売されているが、ディヴァーリーが近づくと5個がRs10で販売されるという(2002年8月 ジャイプル調べ)。

5)手回しロクロ

地面に固定した木製の回転軸に、セメントの円盤を乗せたもの。先端を細くした棒を円盤の縁にあ

る小さな穴に入れ、円盤を回転する。円盤上に土を乗せて水挽きすると回転力を失うため、何度もロクロをまわす必要がある。ロクロをまわすのは男性の仕事で、女性は土こね・材料の準備・窯入れの手伝い、絵付けを担当する。数は少ないが、電動ロクロを使用するクムハルもみられた(2002年8月 ジャイプル調べ)。

6)ラッシー

ヨーグルト飲料。牛乳を土器の皿で4~5時間寝かすことができ。駅やキオスクなどでは、紙パックのラッシーが一般的だが、ジャイプルには、ラッシーを土器のラッシーグラスに入れて販売する専門店が多くある。土器のグラスの独特なにおいや素材が好まれている。ヒンドゥー教の伝統によると、飲食に使用された土器は破棄し、2度と使用されてはならない(Singh 1979)。今日でも、ジャイプルではラッシーやチャイに使用されたグラスが路上に捨てられている。

7)焼成方法

焼成時に窯の上に土をのせ水をかけると、煙が逃げないため、還元焼成になる。

詳しくは、Sarawati Baidyanath の Pottery techniques in Peasant India, 1966 を参照のこと。

8)チャイ

水とミルクで紅茶を煮出し、カルダモン、ショウガなどのスパイスを加えたもの。

9)Rs(ルピー)10~15

日本円で約30円程度。インドの物価は日本の約10分の1とされており、Rs10が日本円で約25円に値する。調査地ジャイプルでは、バナナが1kgでRs30で販売されていた(2003年8月調べ)。

10)チャパティー

北インドの主食の、発酵させていない平らなパン。

11)ディヴァーリー

インド全域でおこなわれる燈火祭。カールuttiカ月(10月~11月)の新月の夜の宵におこなわれ

る。家や寺院の内外に灯火を灯し、ラクシュミー女神を拝む(中村 1979)。夜になると、ディーパック(註4)の飾り火を灯し、歌をうたい、踊り、花火をする。最近では、ディーパックと併用してキャンドルも使用される。

12)ブルーポタリー

ブルーポタリーは、主に海外向けに輸出される青や黄色の鮮やかな陶器である。ペルシアに起源があるとされ、13世紀頃にインドに伝えられた(Saxena 刊行年不詳)。ブルーポタリーの製造は、石膏型が使用される本体作り、デザイン、ペインティング、窯入れの4段階で成り立ち、複数のカーストがブルーポタリーの製造に関わっている。本体作りには、仕事の類似性からクムハルが関わっていることが少なくない。ペインティングに限り、上層カーストによってなされている場合もある。

13)義務教育

インドでは、6歳から13歳までの8年間は義務教育として定められている。義務教育は無償だが、貧しい家庭では子どもも働き手とするため、実際には学校に行かない子どもも多い。義務教育後は、中等教育(14~16歳)、上級中等学校(16~17歳)、大学という順番で進学する。

14)プージャ

ヒンドゥー教徒の生活の基本である礼拝。ヒンドゥー教の礼拝には、日常的に家庭や寺院でおこなわれるものと、大供養祭として数時間の時間を要するものがある(少年社 2002)。

15)リング

男性性器。シヴァの象徴として崇拝される。リングは石で作られ、頭の丸い円筒形をしている。多くの場合リングは、女性性器をかたどったヨーニという台座に直立している。

16)女神

女神崇拝は、インダス文明の時代までさかのぼり、

インドでは今でも女神が広く崇拜されている。代表的な女神として、ラクシュミー女神、サラスヴァティー女神、カーリー女神があげられ、祭りや儀礼が定期的におこなわれている(八木 1998)。北インドの女神崇拜については、八木祐子の「女神の身体・女性の身体 - 北インド農村の女神崇拜」を参照のこと。

17) マヌ法典

マヌ法典は、数あるダルマシャースト(註 18)のうちでも最も重要とされ、人を社会階層としてバラモン(僧侶階層)、クシャトリヤ(戦士階層)、ヴァイシャ(商人階層)、シュードラ(奴隷階層)のように四姓とし、個々の人間を四住期に分ける。四住期は学生期、家長期、林住期、遊行期に分けられ、それぞれの時期におこなわれる儀礼がある(少年社 2002)。

18) ダルマシャースト

家長の執りおこなうべき儀礼の数々を定めたもの(渡瀬 1990)。

19) リグ・ヴェーダ

リグ・ヴェーダでは、雷(インドラ)、火(アグニ)、暴風(ルドラ)、太陽(スーリヤ)など、自然の力・自然現象を擬人化して崇拜している(辛島 1999)。

参考文献

少年社 福士 齊 佐々木勝(編)

1995 『ヒンドゥー教の本：インド神話が語る宇宙的覚醒への道』 学習研究所

榎根 勇

2002 『水と女神の風土』 古今書院

辛島 昇(編)

1999 『世界歴史の旅 北インド』 山川出版社

鹿野 勝彦

1978 「ベンガル農村のクムハル土器づくりカー
スト：バングラデシュ、タンガル県ルミザブ
ール群の事例から」『民族学研究』第9巻, 103

- 123 頁

関根 光宏

2000 「インド西ベンガル州における土器および
その製作技術」『物質文化』68号, 32 - 53 頁

関根 康正

1995 『ケガレの人類学 - 南インド・ハリジャン
の生活世界』 東京大学出版会

外川 昌彦

2003 『ヒンドゥー女神と村落社会：インド・ベ
ンガル地方の宗教民族史』 風響社

田中 雅一

1996 「女神の水・女神の血：スリランカと南
インドの聖河信仰」『水の原風景：自然と心
をつなぐもの』 福井勝(編) 116-131 頁
TOTOTO 出版

辻 直四郎(訳)

1970 『リグ・ヴェーダ賛歌』 岩波書店

中谷 純江

1995 「インド・ラジャスターン州のラージプ
ト女性の宗教慣行：ヒンドゥー女性にとつ
ての自己犠牲の意味」『民族学研究』 第60
巻, 53 - 74 頁

中本 元

1979 『ヒンドゥー教史』 山川出版社

三木 稔

1994 「女神祭祀の変容：インド・ラジャスター
ン州メーワール地方の事例から」『民族学研
究』 第58巻, 334 - 355 頁

山折 哲雄

1996 「インドの聖水信仰」『水の原風景：自然と
心をつなぐもの』 福井勝義(編) 96 - 113
頁 TOTOTO 出版

八木 祐子

1991 「儀礼・職能カースト・女性：北インド農
村における通過儀礼と吉と凶の観念」『民族
学研究』 第56巻, 181 - 208 頁

- 1991 「リータの結婚：北インドの婚礼儀式と歌」
『季刊民族学』 第15巻, 114 - 122 頁
1998 「女神の身体・女性の身体 - 北インドの農
村の女神崇拜」 『女神 - 聖と性の人類学』
田中雅一(編) 平凡社
Publishing Company
Shulman David
1980 Tamil temple myths: sacrifice and
divine marriage in the South Indian Saiva
tradition.
Princeton: Princeton University Press
- 吉田 敦彦
1996 「神話における水」 『水の原風景：自然と心
をつなぐもの』 27 - 47 頁 福井勝義(編)
TOTO 出版
Singh Gurcharan
1979 Pottery in India. Vikas Publishing
House PVT LTD
- 渡瀬 信之
1990 『マヌ法典：ヒンドゥー教世界の原型』
中公新書
Singh K.S.
1999 The scheduled castes revised
edition. Anthropological survey of
India: Oxford University Press
- Prayag (edi)
Vardhman's Destination Guide Jaipur
City: Tourist Road Guide and
Political, Vardhman's Publications, Delhi
公的出版物
- Saxena AN
Blue Pottery in Jaipur. New
Delhi: National Productivity Council
Census of India 1991 Table 3: Density, Percent
decadal variation
Census of India <http://www.censusindia.net>
Office of the Registrar General
India 2A, Mansingh Road, New Delhi - 110 011, India
- Saraswati Baidyanath
1966 Pottery techniques in peasant
India. Anthropological Survey of India
1979 Pottery-making cultures and Indian
civilization. Abhinav Publications
謝辞
- Shantha Krishnan
1989 Traditional Potters: Entitlements
and enablements of Artisans. Indus
調査にあたっては、坂田貞二教授(拓殖大学)に多
大なご協力をいただいた。また、八木祐子助教授
(宮城学院女子大学)は、北インドの婚姻儀礼に関
する貴重な資料を提供して下さった。最後に
Mohan Kumar Vermaをはじめ、著者の滞在中にお世
話になった人々へ感謝の意を表す。

	冷蔵庫	浄水器	マッカ	マッカの買い替え頻度
ジャイプルインフォーマント(1)				1ヶ月に一度
ジャイプルインフォーマント(2)		×		水が冷えなくなってから
ジャイプルインフォーマント(3)		?	×	水が冷えなくなってから
ジャイプルインフォーマント(4)	×	×		夏場は1~2ヶ月に一度
デリーインフォーマント(5)				壊れるまで使用
デリーインフォーマント(6)				壊れるまで使用
デリーインフォーマント(7)	×	×		1~2ヶ月に一度
ジャイプルインフォーマント		×		水が冷えなくなってから
ジャイプルインフォーマント	×	×		水が冷えなくなってから
ジャイプルインフォーマント	×	×		水が冷えなくなってから
ジャイプルインフォーマント	×	×		水が冷えなくなってから
デリーインフォーマント		×		夏場は3~4ヶ月に一度

・・・所有している

×・・・所有していない

図3 聞き取り調査の結果